

令和7年度 学校関係者評価書(様式)

鈴鹿市立神戸中学校		NO. 1		
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
学力向上×ICT活用	○基礎学力の定着と授業改善 ・生徒が主体的に学び合い、つながり合うために設定する課題についての研究を進める。 ・習熟度別授業の実施(2年生数学) ・家庭学習の定着に向けて取り組む。 ・学び合い、つながり合うための効果的なICT機器の活用	●全国学力学習状況調査は国語、数学、理科とも全国平均を下回った。2年生みえスタディチェックの国語、数学についても県平均を下回った。 ○1年生国語、数学、理科、2年生理科のみえスタディチェックは県平均を上回った。 ○生徒が主体的に学ぶことについてはアンケートから市を上回ることができた。 [鈴鹿市アンケート:「自ら進んで勉強に取り組んでいる」]【67.3% 市比+0.4】 ●“つながりあう”ということについてはアンケートから市を下回っているので、課題設定やICT機器の活用には課題がある。 [鈴鹿市アンケート:「授業でわ」からないことを友だちに聞くことができる」 【92.1% 市比-0.5】 ●家庭学習については、アンケートから定着が見られず課題がある。 [鈴鹿市アンケート:「家庭学習1時間以上の割合」※塾等は含めない 【27.2% 市比-4.1】]	・今後も各教科において課題設定等にこだわり、協同的な学びの場を増やしていく。 ・C,D層を支える個別最適な学びに向けた授業改善に取り組む。 ・家庭学習については定着するように、宿題等についての内容等検討していく。また、これについては学校だけでは難しく、家庭の協力も得て進めていく。 ・授業における効果的なICTの活用については今後も研修部や情報担当者を中心に組織的に進めていく。	・小学生の時は家でよくやっていたが、中学生になってあまり勉強しなくなったという声を聞きます。宿題を増やすなど対策が必要なのでは。 ・家庭学習について、いろんな家庭事情もあるので協力を得るためには、目的をわかりやすく説明したほうが良いのでは。 ・家庭学習が定着できるように宿題等の検討されるのはいいと思う。しかし、中学生になって家庭の協力を得るのは疑問を感じる。家庭で見たり声かけをするのは小学校で、しっかりとできていたほうが良い。 ・自ら学ぶ姿勢を是非育んでほしい。学校での学びを自宅でも引継ぐ生活リズムの見直しです。ICT機器を活用する方法もあると思います。 ・生徒一人ひとりに対して意欲を促すための授業の工夫と熱意を望みます。家庭学習については習慣づけが大事なので、根気よく学校でも指導し、家庭へも促していただきたい。 ・ICT機器の活用により、わからないことをすぐに調べられるという点で良いと思いました。 ・家庭学習は、塾や部活動があるなか、取り組むよう促すが、なかなか難しい。
長期欠席対策	・安心できる学級づくり[エンカウンター・ラーニング・タイム] →毎週木曜日帰りの会の前にエンカエンターを行う。 ・校内組織の向上 →学年、サポート教室、通級指導教室、保健室、SC(スクールカウンセラー)との連携 →生徒の状態に合わせた別室対応 ・関係機関との連携 →鈴鹿市適応指導教室、子ども家庭支援課、医療機関、フリースクール等との連携を図り、必要な支援を得る。 ・人権、特別支援教育に係る研修の充実を図る →学期に1回は実施する。	●昨年同月(12月)比較で長期欠席生徒の割合は増加している。 【長期欠席生徒の割合:+1.8】 ○毎週はできなかったが、ELT(エンカウンター・ラーニング・タイム)の実施により安心できる学級づくりにつながった。 [鈴鹿市アンケート:「クラスでは安心して学ぶことができる」]【92.2% 市比+4.1】 [鈴鹿市アンケート:「学校に行くのは楽しい」]【89.9% 市比+7.6】 [鈴鹿市アンケート:「学校に行きたくないと思うことがある」]【47.7% 市比+4.0】 ○各校内組織とも丁寧な生徒の状況を共有することができた。また、サポート教室については、生徒に寄り添い、生徒の状況に応じた対応を心掛けることができた。 ●“新たな不登校を生まない”を目標に掲げ、昨年度欠席30日未満、今年度15日を超えた生徒の‘こども支援シート’を作成し、学年内で情報をより細かく共有し、教職員の共有対応を目指したが、シートの作成が主になってしまっていた。 ○関係機関とも連携を図りながら生徒の対応を進めることができた。 【鈴鹿市適応指導教室:5名、支援課・子家課:9名、医療機関:5名、フリースクール:1名】 ○人権教育、特別支援教育に関わる研修については、校内での実施、および長期休業期間等に校外で行われるものに積極的に参加することができた。	・次年度もエンカウンター・ラーニング・タイムを継続し、安心できる学級づくりに努める。 ・長期欠席者対策の初期対応の充実を図る。 ・常に関係機関との連携を意識して生徒対応にあたる。 ・生徒の本音を引き出せるような関係作りに日々努める。 これは担任だけでなく、学年や様々な立場からより多くの教職員が一人の生徒とのよりよい関係を築く。 ・教育相談部会をさらなる充実を図る。 (より多くの教職員が長欠生徒に関心を持ち、一丸となって不登校対策に取り組む職場を目指す。) ・関係機関との連携を図って取り組む。	・この問題に決め手はない。各個人とのコミュニケーション。まずは、よく対話すること、学校の楽しさを伝えること。 ・長期欠席者にはどのような支援があるのかほとんどの家庭は知る機会がない。資料等があるのなら周知してはどうか。 ・サポート教室が充実してきているので、子どもたちも出席しやすくなってきているのではないかと思う。 ・関係機関と連携をして子どもに合った所に行くのがいいと思う。連携先に行っても、その後の状況は把握してほしい。 ・子どもたちへ可能な限り寄り添った指導の推進、左記の通りと思います。通級指導も取り入れてはどうでしょう。 ・新しい取組(ELT)をされているが依然として長期欠席、不登校の割合は減少していない状況である。さらに実態に応じた登校支援について努力をお願いしたい。 ・長欠生徒の増加は本校だけでなく、全国的な課題と思います。個別事案ごとに丁寧に対応していくことしかないと考えます。 ・登校しづらい子どもたちに学校の様子や連絡事、配布物等を知る、見ることができると学校にも行きやすくなると思うので家庭、子どもと連絡することは良いこと。
非認知能力育成	・育成のための取組[エンカウンター・ラーニング・タイム] →毎週木曜日帰りの会にエンカウンターを行い、非認知能力の育成に努める。 ・中学校区で連携した取り組みを実施 →校区校園長会等で現状を把握し、育成のための方策等を研究する。 ●4つの要素【①やりぬく力 ②自制心 ③自己肯定感 ④社会性】の否定的な回答をする生徒の割合を①②③は10%以下。④は2%以下とする。	○非認知能力に関する鈴鹿市のアンケートを5月と11月に実施し、その結果から4つの要素ともに向上が見られ、鈴鹿市の目標値をクリアできた。この要因と思われる“エンカウンター・ラーニング・タイム”は今後も継続して実施していく。※否定的回答の割合 ①やりぬく力 [5月:23.7% 11月: 9.0%]→【前回比: -14.7】 ②自制心 [5月:28.5% 11月:11.9%]→【前回比: -16.6】 ③自己肯定感 [5月:16.1% 11月: 9.9%]→【前回比: -6.2】 ④社会性 [5月: 3.7% 11月: 1.3%]→【前回比: -2.4】 ○●中学校区で非認知能力を重点取組としてきた。本校としては、「肯定的な言葉がけ」、「思いの共有」を中心に取り組んできた。ただ、もう少し具体性のある取り組みが必要であったと思われる。 ●学校として取組を進めていくためには、より具体的な取組を組織的に進めていく必要がある。 ◇その他のアンケート結果(トップボックスの数値) ※トップボックスとは最も肯定的な回答 「先生はあなたの良いところを認めてくれる」【63.2% 市比+7.2】 「家の人は私の良いところ、がんばりを認めてくれる」【64.4% 市比+7.1】 「クラスの仲間は私の良いところ、がんばりを認めてくれる」【46.6% 市比+4.2】	・次年度もエンカウンター・ラーニング・タイムを継続し、よりよい人間関係を築き、安心できる学級づくりに努める。 ・肯定的な言葉がけ(具体的には“ありがとう”の言葉)に努める。 ※教職員から生徒、生徒同士。 ・学校行事、学校通信、学年通信、学級通信等で生徒の思いを共有する機会を意図的に設ける。また、それに対する反応についても返していく機会を忘れない。さらには、掲示物も意識的に利用し生徒が目にする機会を増やす。 ・中学校区としての取組も強化していく。	・数字に表せないことと理解している。まずは、朝のあいさつなど先生と子どもとの対話のしやすい環境づくりなど改めて見直していくことも大切だと思っています。 ・“ありがとう”の言葉がけの取組は良いと思う。恥ずかしくて言えない子ども周りが言っていればいえるようになるのでは。 ・エンカウンター・ラーニング・タイムは継続し、自己発見やコミュニケーション能力の向上につなげていくとよいと思われる。 ・やりぬく力の育成から自己肯定感の涵養だと思っています。ほめたり、認める指導の徹底。 ・生徒の能力を引き出せるような様々な取組を行っていることを評価します。 ・ELTとはどういうものなのか。また、否定的回答の減少につながった具体的なものは何か知りたい。 ・今の子どもは「褒めて伸ばす」が大事なのだと思う。褒められる、認められるというのはモチベーションを上げる。挨拶や感謝を伝えることを当たり前になるよう取り組んでほしい。
地域連携	・学校通信、ホームページの充実(年間20号以上) ・近隣校との連携(小学校、高校) ・まちづくり協議会との連携 ・体育祭、文化祭の参観 ・学校運営協議会委員による授業参観	○学校通信については20号以上の発行ができた。 ●ホームページについてはさらに充実できる余地がある。 ○校区小学校、高校(神戸高校)との連携について、小学校とは引き渡し訓練、人権フォーラム。高校とは、中学校での補充学習講師として連携を図っている。今後さらに取り組んでいきたい。 ●学校運営協議会委員の方による授業参観の機会があまりとることができなかった。 ●地域との除草作業への生徒の参加数を増やしたい。	・学校通信、ホームページ等で学校の様子を伝えていく。 ・地域行事への生徒、教職員の参加呼びかけを継続して行う。 ・保護者、地域の方に学校を参観してもらう機会の継続、もしくは機会の増加を目指す。	・学校運営協会のアピール。および、地域との除草作業等生徒を交えて行っていく。 ・ホームページの充実化はぜひ進めてほしい。 ・校外へ出て、異年齢との交流を増やす。非認知能力の育成にもつながるのでは。 ・除草作業を生徒たちと一緒にできて良かった。 ・学校の様子を今後もできるだけ早く、わかりやすく家庭、地域へ発信してほしい。 ・除草作業では多くの生徒の参加があり環境美化と労働奉仕の意識の向上に繋がったものと評価する。 ・コロナ禍から学校での子どもたちの様子を生で見る機会が少ないのは残念。 ・除草作業は子どもたちも参加してくれて自分たちの学校をよりよくする意識が高くなっている。
学校における働き方改革	・総勤務時間の縮減に向け、月ごとの時間外労働時間の可視化 ・月45時間、年間360時間を超える年間延べ人数 ●0人 ・時間外労働(月平均時間/人)●30時間以下 ・60分以内に終了する会議の割合●90%以上	●各職員の時間外労働時間の可視化は行ったが、課題もあり、中途半端となり、今年度は実現できなかった。 ●月45時間、もしくは年間360時間を超える職員は出てしまった。 ○12月現在での平均時間外労働は24.3時間で目標の30時間以下を達成している。今後時間外労働時間の縮減に向け取り組んでいく。 ○12月現在での60分以内に終了する会議の割合は90%を上回り、目標を達成している。今後も取組を進めていきたい。	・ICTを利用してさらなる時間外労働の縮減に努める。 ・休みの取りやすい、定時退校しやすい等、風通しの良い職場の雰囲気づくりに努める。	・最近は徐々に良くなっていると思います。定時退校日を増やしてもいいのでは。 ・会議の時間短縮の取組は良いと思う。難しいとは思うが職員の数が増えれば大幅に削減できると思う。 ・今後も会議時間の短縮とICT活用などで労働時間の縮減をしてほしい。体調管理が一番だと思う。 ・スクールサポートスタッフの有効活用。 ・今後部活動の地域移行でどれほどの効果があるかを注視させていただきます。 ・部活動がどうなっていくのか不安は隠せない。 ・先生方の負担が多く、夜遅くまで電気がついているので大変だと思う。